

東日本大震災からみる「物語化」の暴力性と私たちの使命

木村 瑛月
きむら さつき

株博報堂

マーケットデザイン事業ユニット
クリエイティブ局 竹内チーム
コピーライター



1998年生まれ。宮城県出身。東北大学大学院農学研究科で森林生態学を専攻。2023年株博報堂入社。クリエイティブ局にコピーライターとして配属され、広告制作に従事。TVCM、グラフィックはもちろん、様々な領域でコピー・コンセプト開発を中心に担当。

この度は、栄誉ある賞に選出いただき、大変光栄です。コピーライターとして、自分なりの覚悟を表明する場所にしようと、ひそかに思ったことが執筆の出発点です。まだまだ未熟者ですが、言葉を軸に表現することへの責任と向き合いながら、どんなときでも言葉の可能性を信じて、諦めず、粘り、書き続けたいと思います。最後に日々ご指導いただいている方々に、この場をお借りして感謝申し上げます。

1 はじめに

「俺は、お前たちの物語にはならない。」これは、2020年にTBS系金曜ドラマ枠で放送された「MIU404」の最終話に出てくる台詞だ。逮捕後の犯人が自身の過去や犯行動機を聞かれた際に警察関係者である主人公たちに、この言葉を放ち、その後完全黙秘を貫いた。脚本を務めた野木亜紀子氏は社会問題への鋭い視点が注目される脚本家の一人で、この台詞も単にドラマ内の言葉にとどまらず、他者によって自分の物語を決めつけられることへの抵抗や社会が個人の物語をステレオタイプや既成概念で決めつけようとする事に対する疑問を投げかけている言葉だと話題になった。そして筆者自身、この言葉を聞いたとき、ある過去の経験を思い出していたのである。

2011年3月11日東日本大震災、私は宮城県で被災した。ちょうど中学校への入学をひかえた小学校6年生のときだった。その後、

無事中学校に入学することができ、3年間普通の中学校生活を送った。卒業式を間近にひかえたある日、学年主任の先生が一つの提案をしてきたのである。「入学直前に“つらい大震災を経験してきた”君たちに、卒業式で『花は咲く』を歌ってほしい。」「『花は咲く』とは、NHK東日本大震災プロジェクトの一環として2012年3月に発表された復興支援のテーマソングである。被災地にゆかりのある著名人たちが歌いつなぐ姿が話題となった名曲だ。しかし、その言葉を聞いた私は、猛烈な違和感とともに「大人が感動するためだけの材料にされる」と感じたことを今でも鮮明に覚えている。震災がつらくなかったわけではない。それでも、震災に関わらず様々な楽しい経験をしてきたはずの中学校最後の締めくくりに、復興ソングを歌うことは、結果として第三者が欲する「つらい大震災を乗り越えて3年間頑張ってきた中学生」という一つの勝手な震災物語に収斂されてしまうことに憤りを感じたのだ。その感覚は、この出来事だけではなく、当時被災地に向けて送られ

てくる応援メッセージやメディア報道にも同様の感情を抱いていた。そして、広告表現に対しても例外ではない。メッセージを通して、世間が求めている一方的な被災者像にうんざりしていたのだ。

一方、私は現在、コピーライターという職に就いている。その生業は奇しくも、言葉の力で人々の生活の中に物語を紡ぎ出すことを主とする。過去に「他者の物語にはなりたくない」と感じた経験がありながら、その一端に足を踏み入れるコピーライターとして走り始めたことに、ある種のジレンマを抱えていた。また、東日本大震災は発生から10年以上経ち、風化の一途をたどっていることは否めない。さらに新型コロナウイルスなど、次々と発生する想定外の事態によって人々の関心は上書きされ、風化がますます加速している。その関心の薄れは、東京をはじめとする非被災地で顕著だということを私は身を持って強く感じた。だからこそ、一被災者として、いま改めて「東日本大震災を伝える」ということを軸に、論じるべきだと考えた。本論文では、被災経験を持つ筆者自身の葛藤を出発点に、東日本大震災を題材として、表現における「物語化」について紐解いていく。

2 東日本大震災をめぐる「物語化」

東日本大震災は発生からこれまで、数多くの分野で題材にされ、同時にその表現のあり方が議論されてきた。被災者や被災地という表象だけが繰り返し報道される中、その経験が他者によって安易に「物語化」されてしまうことに、憤りを強く感じていた者も少なくない。また、マスメディアによる報道だけではなく、映画や小説など架空の物語を提供する娯楽メディアにおいても、東日本大震災を題材にした作品が多く存在している。

当時、東日本大震災の大津波が東北地方沿岸部に甚大な被害をもたらす中、岩手県釜石市の児童・生徒約570人が全員無事に避難したことが大きな反響を呼んだ。特に中学生が小学生の手を引きながら必死で逃げる姿が話題となり、「釜石の奇跡」と称賛された。しかし、その後明らかになったのは、当事者である生徒の多くが「奇跡」という言葉に違和感や葛藤を抱き続けていたという事実だ。彼らは、亡くなった人たちが大勢いる中で自分たちが助かったことだけが注目されることに戸惑い、起きた事実と「奇跡」という言葉に大きなギャップを感じていた。連日の取材で“奇跡の子”という像を求められることがつらいと感じる生徒もいたという。そして10年以上経った現在も、彼らはその葛藤と闘い続けているのだ。このことは、「多くの小中学生が全員無事に避難した」という出来事が、第三者によって安易に奇跡の物語にされ、その「物語化」が当事者たちの心をさらに傷つける結果となった事例である。

また、東日本大震災を題材にした文学作品にも「物語化」の是非が問われる事例がある。被災したある少女を主人公とした小説『美しい顔』。第159回芥川賞最終候補作に選ばれ、その細やかな感情表現が評価された。しかしこの小説は、非被災者である著者が現地での取材をすることなく、つまり被災者の生の声を聴くことなく、被災者の声が集められた手記集などの文献と文学的想像力のみで作り上げられたという事実を皮切りに、議論を呼んだ。それは、被災地に赴いていない著者が文献調査のみで想像の被災者・被災地を造形したということが、実際の被災者への冒涇にあたるのではないかと議論である。このことについて、社会学者の金菱清氏は、『美しい顔』が“被災者の言葉を奪う”ことで書かれたものであると強く非難した。この“言葉を奪う”とはどういうことか。それは、単

なる文献からの剽窃ということにとどまらない。それぞれが複雑な想いや覚悟をもって書かれた手記集。そこから被災者の声を簡単に切り取り、安易に小説のネタとして利用することは、被災者たちの言葉に対する敬意があまりにも足りないと言ったのだ。現にこの小説はフィクションであるにも関わらず、描かれる情景や登場人物の行動は手記集に記された実際の被災者の体験と類似点が多かったという。それはまさに、他者が自分の利益のためだけに、被災者のトラウマの経験・記憶を“奪う”行為だと言えるだろう。

これらの「物語化」は、被災地で起きた出来事や被災者たちの姿を印象深く伝えるということにおいては役割を果たしたのかもしれない。しかしそれは、非被災者たちが理解しがたい大災害という事実を理解するため、あるいはその恐怖に対してある種の安心を得るための材料として、被災者たちの経験を消費したに過ぎないのである。

3 「物語化」の暴力性

そもそも私たちが生きていくうえで、「物語化」はどのような役割を果たすのか。たとえば、人は自然災害をはじめとする理解しがたい不条理な出来事に直面したとき、それを理解するために出来事の点と点をつなぎ合わせて、いくつかの物語をつくる。そして、社会の中で共有されたそれらの物語を通して、不条理な経験に意味を見出していくのだ。それはときに、その事実を想像し、自分なりに思いやり、すべての人が手を差し伸べながら生きていくためには必要な行為とも言える。さらに、そのようにして社会の中で紡ぎ出された物語たちは経験を後世に伝えていくためのコミュニケーションとしても使われる。

岡真理氏は、著書『記憶/物語』の中で、

他者の記憶を「物語化」することの暴力性について記している。彼女は、出来事がなかったことにされないためには、それを経験していない外部の者たちによって記憶が分有されなければならないとし、出来事の記憶を自ら語る事が困難な当事者たち、あるいはその出来事で犠牲になり証言できない者、すなわち死者たちの代わりに、出来事の外部にいる第三者が証言しなければならないと語っている。しかし一方で、その出来事を第三者が物語る過程において、当事者が纏う空気感や沈黙など“言葉ならざるもの”が捨象されることを「記憶の漂白」と表現しながら、言語化されるものだけが出来事として語られることに疑問を呈している。つまり、本来もっと複雑であるはずの当事者たちの経験や心情が抹消され、わかりやすく意味に還元できるものだけが、まるで出来事のすべてのように共有されていくことは、当事者たちに対して暴力的な行為になりかねないと投げかけているのだ。

また、柳瀬陽介氏は歴史という観点から「物語化」の危険性について次のように語る。歴史は実際に起こったことの実態に基づいた報告でなくてはならない一方で、「私たちは何をなすべきか」という実践的な課題に応えるために規範・正統性・価値を基盤にした「物語」として描かれる。しかし、その「物語化」があまりに単純で安直なものになると、複雑で複合的な現実の出来事が一つの単純な教訓話やイデオロギーに還元されてしまう危険性があると指摘する。東日本大震災も発生から13年の月日が経ち、早くも歴史になろうとしていることは事実だ。震災という歴史的な大災害を伝えていく場合、それを取り巻く一人ひとりの経験や心情を削ぎ落とし、それらを一般化してテンプレートすぎる震災の歴史として伝えていくことは、実際にその出来事を経験した被災者たちに対する暴力性をはら

んでいるのだ。

私たちは他者の経験・記憶を「物語化」することで、その背景にある事実や歴史を理解し、伝えていくことができる。ただし、そこには目を背けてはいけない暴力性が隠れていることを知っておく必要がある。

4 「物語化」に向き合う使命と姿勢

ここまで、「物語化」の暴力性を中心に議論してきた。一方で、広告業界に目を向けると、「物語化」はあらゆる分野において有効な手段の一つでもあり、広くそのスキルが求められる。それを考えると、前述してきたように「物語化」が当事者たちを傷つける暴力的な側面を持つ以上、東日本大震災のような不条理な出来事が立ちはだかった場合、それを伝える存在として私たちは無力にならざるを得ないのだろうか。私は、そのような場合でも広告業界が役割を果たせる可能性は十分にあると考えている。

理解しがたい不条理な出来事が発生し、それでも人々に伝えなければならないとき、我々広告業界に携わる者が発揮すべき力、それは「誰かの人生を物語として伝えた先で、受け手の行動を変えるメッセージを紡ぎ出すこと」だと筆者は考える。つまり、非当事者に対する「自分ごと化」の効果を発揮する物語を紡ぐことが私たちの使命なのだ。それは、他者によって安易に物語化されたものを「消費されるだけの物語」とすると、対して、その出来事を経験していない人々も巻き込みながら未来につながる行動を促す物語、つまり「未来を紡ぐための物語」と言えるのではないだろうか。

「未来を紡ぐための物語」の事例として、Yahoo! JAPANによる防災啓発プロジェクト「ちょうどこの高さ。」が挙げられる。こ

れは、銀座ソニービルに掲出された屋外広告で、震災時に岩手県大船渡市で観測された最大津波16.7mの高さを「ちょうどこの高さ。」という文字と赤い線で表現したものだ。それは見る人の「見上げる」という動作を伴い、これまで言葉や映像だけでは本質的な理解に及んでいなかった災害の恐ろしさを、はっきりと感じさせた。そして同時に、非被災者に対して「自分自身も防災を考えなければいけない」という感情を生み出すことにつながった。つまり、津波という被災者が経験した出来事から、それを東京の街中で非被災者に体感させ、見た人たちの心の中に“これからの防災”について考えるきっかけを生み出した点で、「未来を紡ぐための物語」として機能していると言えるだろう。

また、岩手日報社が東日本大震災の教訓を語り継ぐために行っている「3月11日を『大切な人を想う日』に企画」も「未来を紡ぐための物語」の事例である。この事例では、毎年3月11日に、津波で亡くなられた方々の最後の言葉や「ごめんね。」を言えず未だに後悔が残っている遺族の方々など、テーマを変えながら実際の被災者の経験を題材にした広告を掲載してきた。それらは非被災者に対して涙を誘う物語という文脈で発信されるのではなく、3月11日を非被災者も含めたすべての人にとって『大切な人を想う日』にしていこうという文脈で語られている。つまり、過去起きた出来事に想いを馳せるだけでなく、すべての人が“これからの人生”を生きていくためのメッセージになっているという点で、被災者たちの経験が「未来を紡ぐための物語」になっていると言える。

東日本大震災のような災害では、どうしても経験した者と経験していない者に二分される。だからこそ、私たちは両者の中間に立つ者として、被災者たちが経験した出来事を未来に繋げていくためにはどうすべきかを考え

抜く姿勢が重要なのだ。

5 おわりに

コピーライターは、伝えるために言葉を使う。それはときに、一言でくくことで物事の本質を見えなくしてしまう暴力性がはらんでいることを頭にいれておかなければならない。釜石市の例にあるように、“きせき”というたった3文字で、10年以上抱える苦しみを生み出してしまう怖さもある。しかし、その怖さから逃げるのではなく、そこにある事実と向き合い、伝えるべき言葉を模索していきたい。言葉を扱うコピーライターという職に、より一層の覚悟を持ちながら、それでも、だからこそ、私は書き続けていく。

●参考・引用文献

- 岡真里 (2000), 『記憶／物語 (思考のフロンティア)』 (岩波書店)
- 池上賢 (2017), 「東日本大震災後のストーリー分析の可能性：マンガ作品を事例として」『応用社会学研究』第59巻, pp.73-87
- 坂田邦子、土屋裕子 (2016), 「災害を語り伝えるメディア表現：〈他者〉表象から〈自己〉語りへ」
- 豊原響子 (2021), 「『自分の物語』はいかにして生成されるか—物語を生きることとその途上における問題について—」(京都大学大学院教育学研究科紀要)
- 宮前良平 (2019), 「『被災者の言葉を奪った』とはどういうことか：小説『美しい顔』をめぐる論争から」『未来共生学』, 第6集, pp.426-432
- 柳瀬陽介 (2018), 「なぜ物語は実践研究にとって重要なのか読者・利用者による一般化可能性」『言語文化教育研究』, 第16巻, pp.12-32

●参考・引用サイト

- TBSテレビ, 「金曜ドラマ『MIU404』」, (https://www.tbs.co.jp/MIU404_TBS/), 2024.9.27
- NHKアーカイブス, 「復興支援ソング『花は咲く』」, (https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0026040881_00000), 2024.9.27
- Yahoo! JAPANニュース, 「“釜石の奇跡”当事者の葛藤、教訓伝える26歳「命守るため」東日本大震災からまもなく13年」(2024.3.8), (<https://news.yahoo.co.jp/articles/5a5dbcc0e4b63bde221643edeede6bdd2f6a834a>), 2024.9.27
- 河北新報 (オンライン), 「『あの日』をどう伝えれば…若手記者、答えを探して被災地へ」(2022.3.7), (<https://kahoku.news/articles/20220306khn000014.html>), 2024.9.27
- 読売新聞 (オンライン), 「[東日本大震災10年 秘話] <5>避難誘導釜石の奇跡、共助のリレー」(2021.1.14), (<https://www.yomiuri.co.jp/shinsai311/feature/20210113-OYT1T50255/>), 2024.9.27

東洋経済（オンライン）, 「テレビが震災特番で伝えた3.11から10年の重み「美談」を安易に持ち出さず、外さなかった本質」(2021.3.12), (<https://toyokeizai.net/articles/-/416604>), 2024.9.27

産経新聞（オンライン）, 「芥川賞候補作「美しい顔」、既刊本と一部記述が類似 震災への向き合い方と表現のあり方問う」(2018.7.11), (<https://www.sankei.com/article/20180711-55J2777WNZORBKTTTC4MRYAPZZE/>), 2024.9.27

Yahoo! JAPAN ニュース, 「芥川賞候補「美しい顔」は「彼らの言葉を奪った」被災者手記・編者の思い」(2018.7.7), (<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/9643c5ad1a4a28b3a1bdc d25b3f43adb4d99271e>), 2024.9.27

新曜社通信, 「東北学院大学 金菱清「美しい顔」(群像6月号) についてのコメント」(2018.7.5), (<https://shin-yo-sha.cocolog-nifty.com/blog/2018/07/post-3546.html>), 2024.9.27

日本パブリックリレーションズ協会, 「「ちょうどこの高さ。」一枚の看板で、日本中に想像力を。」, (https://prsj.or.jp/pr-award/list/list2017/prag2017_grandprix/), 2024.9.27

岩手日報社, 「3月11日を『大切な人を想う日』に企画」特設サイト (<https://www.iwate-np.co.jp/content/taisetunahito-omouhi/>), 2024.9.27